

# “Roger Malvin's Burial”における誓いの 二元性と結末の曖昧性

中 村 正 廣

ホーソンの短編“Roger Malvin's Burial”(以下“RMB”と略記する)は結末の部分の不可解さ故に様々な解釈を許してきた。作品中で幾度となく繰り返されていることでありながら、ルーベンの誓いの二元性という問題にはほとんどメスが入れられておらず、そのために結末部分に見られるルーベンの誓いの履行の意味は過小評価されている。<sup>1)</sup> クルーズとアーリックがその精神分析的解釈によってルーベンがマルヴィンに対して抱いていた自己懲罰と復讐という感情を同時に昇華したことを指摘し、ルーベンの内面の二元性を明らかにしてくれたが、<sup>2)</sup> しかし、この解釈ではフロイドの主張する父と子の関係をこの短編の中に読み込もうとする余り、短編の冒頭に見られるホーソンの歴史への言及は看過され、また更に重要なことだが、ルーベンの経験のユニークさ、結末部分の語りのアイロニーは無視されてしまっている。本稿ではルーベンの誓いがどのようにして二元化し、そしてそれが結末の部分に於いて「祈り」に昇華するのに如何に機能しているかを考察したい。

## (1)

そもそもルーベンは如何にして曖昧な誓いを立てるに至ったか。何故に曖昧な形を取らざるを得なかったのか。結末部分を読み解くうえで極めて重要だと思われるこの疑問の解明に役立つ状況をホーソンは冒頭から克

明に描出している。作品の冒頭ホーソーンは1725年のラヴェルの戦いの歴史的状況についてアイロニカルに述べているが、その作品の冒頭の段落で頻出した「ヒロイズム」「雄々しさ」「武勇」「騎士道精神」<sup>3)</sup>といった言葉の余韻が消え去らぬ中で、死を覚悟したマルヴィンは「樅の木の葉で覆われて」「獵師と古つわ者が眠る」のを知らしめる「碑」(p. 340)としての岩の下で横たわることができれば何も要らないと明言しつつ、他方では居残ることの空しさと死の恐怖をルーベンに言い含める。従来焦点を当てられながら結末部分と切り離されて考察されがちであったこの緊張した状況の中にこそ、我々は多くの意味を見出すべきだと思われる。断固として立ち去ることを拒否するルーベンの姿勢がマルヴィンによって崩されていく過程は、以上の状況を敷衍補完する形になっているのである。

マルヴィンにドーカスの孤独を指摘されたルーベンが、利己的感情がうごめくのを意識しつつも決定的に立ち去る気持ちにさせられたのは、マルヴィンが自分は助かるかもしれぬと漏らしたからである。

No merely selfish motive, nor even the desolate condition of Dorcas, could have induced him to desert his companion, at such a moment. But his wishes seized upon the thought, that Malvin's life might be preserved, and his sanguine nature heightened, almost to certainty, the remote possibility of procuring human aid. (p. 342)

自分だけは助かりたいという生存本能、またそれに付随したドーカスを一人にしたくないという気持ちがルーベンの中に存在すること自体は語り手は否定していない。しかし、この二つの動機だけではルーベンは納得しない。マルヴィンはその辺りを把握していて自分が助かる可能性があることをほのめかし、これと類似した具体例、つまり彼がカナダから重傷の友人を無事連れ帰った話を語って聞かせる。それに対してルーベンは決定的

影響を受けるのである。

This example, powerful in effecting Reuben's decision, was aided, unconsciously to himself, by the hidden strength of many another motive. (p. 343)

ルーベン自身も意識していない「他の多くの動機」には上の二つの動機以外のものがあることを語り手は明言している。ここに至って利己的感情などの動機を隠す必要性は全くなく、またルーベンは既に利己的感情を意識していたのであるから、ルーベンが立ち去る気持ちになったのは上の二つの動機以外に「他の動機」があったからに他ならない。

これまで利己的動機が自分の意識に上るのを覚えながら、ルーベンがマルヴィンを置き去りにするのを躊躇したのは、自分が助かりマルヴィンが一人死んでいくという現実が重くのしかかって来たからであった。もしマルヴィンを置き去りにすれば、ドーカスや村の人々が自分の行為をどう捉えるか。これがどれだけ大きな問題であるかということはルーベンは百も承知なのだ。村に辿り着いたとき義父に当たるマルヴィンに「死ぬまで忠実」(p. 348) でなかったことが判明すれば、ルーベンがドーカスの結婚相手にふさわしいと皆が認めないということは明らかであった。

いやドーカスとの結婚という個人的な問題だけにとどまらないところにルーベンの苦悩はある。ラヴェルの戦いはやがて後のアメリカ人たちによってアメリカの自由独立と結びつけられていくが、ロバート・ディリィによれば、“RMB” が書かれた頃アメリカの人々は先祖崇拜の神話を信奉し、又無駄な犠牲であればあるほどその行為は榮譽となるという盲目的な騎士道精神に感化されたところがあった。後のラヴェルの戦いについての見方を歪曲したトーマス・シムズの説教では、この戦いに参加した人々は「臆病者」と呼ばれるよりは「神の摂理」に命を預ける、即ち死んだ方がよいと皆で誓いあったことが紹介されている。事実当時のアメリカ人たちはラ

ヴェルの戦いの叙事詩的側面に興奮するばかりであった。<sup>4)</sup> 作品冒頭の「武勇」「騎士道」といった語彙が浸透する雰囲気の中で、ルーベンが頑ななまでに居残ることを主張して譲らなかつたのは、ルーベン自身このようなヒロイズム願望に毒されていたからなのだ。マルヴィンの言葉に高揚させられて「臆病者」「本当の男」(p. 342) といった言葉を口にするのも、彼のヒロイズム願望が表面化したものと考えられる。以上の意味で、マルヴィンが助かるという可能性の呈示は、ヒロイズム願望と生存本能に引き裂かれたルーベンの苦境を一時的にであれ解決してくれるのである。

このようにしてそのヒロイズム願望を満足させられたルーベンは、彼の意識が直面している現実、即ち、マルヴィンの死という厳しい現実を避けられぬものとして受けとめる。マルヴィンが助かる可能性を示唆した直後は、ルーベンは血染めのハンカチに「連れの命を助けるためか、埋葬するために戻ってくる」(p. 344) と誓いながらも、立ち去る際には「戻ってロジャー・マルヴィンの埋葬を行うという最も厳粛な約束の重要性を肌で感じる」(p. 345) のである。ルーベンのヒロイズムへの憧憬は生存欲に完全に取って代わられたかに見える。しかし、語り手はルーベンの心の機微を次のように語るのである。

His generous nature would fain have delayed him, at whatever risk, till the dying scene were past; but the desire of existence, and the hope of happiness had strengthened in his heart, and he was unable to resist them. (p. 345)

「寛容」という語は自分の命を他人のために犠牲にするという意味でヒロイズムと関係づけられていることは明白だが、マルヴィンが自分の助かる可能性を示唆してから語り手がこのような願望を表す叙法を用いている事実は注目すべきであろう。ルーベンの意識を具に分析し読者に解釈する語り手が、一方に於いてそのような姿勢を崩すことなくルーベンの意識を全

知的に描写しながら、他方に於いて引用のような願望の叙法を繰り返しているのは、ルーベンのヒロイズム願望が充足したことを強調していると解釈できる。引用文のシンタクスはルーベンが終始無力な受け身の状態にあることを改めて呈示しているが、<sup>5)</sup> ルーベンの願望充足も同じ状態にある。だからこそルーベンは罪意識らしいものを感じながらマルヴィンを後にするのである。

以上のように、ルーベンがマルヴィンを置き去りにするくんだり、ルーベンの誓いがマルヴィンの埋葬というただ一元的なものに止まらぬことを示唆している。開拓地に辿り着いたルーベンの苦悩の描写の中で、語り手はこの誓いの二元性を更に追求していくのである。

## (2)

瀕死の状態で見送られ開拓地に戻ったルーベンは、生への利己的執着故にマルヴィンの運命が決まらぬうちに逃げ帰ってきたことを自他共に認めることができない。事実の隠蔽のために罪意識に苛まれるルーベンの心理を語り手は次のように語る。

For years, also, a thought would occasionally recur, which, though he perceived all its folly and extravagance, he had not power to banish from his mind; it was a haunting and torturing fancy, that his father-in-law was yet sitting at the foot of the rock, on the withered forest-leaves, alive, and awaiting his pledged assistance. These mental deceptions, however, came and went, nor did he ever mistake them for realities; but in the calmest and clearest moods of his mind, he was conscious that he had a deep vow unredeemed, and that an unburied corpse was calling to him, out of the wilderness. (p. 349)

ルーベンが堅く約束した救助をマルヴィンが生きのまま待っているという「空想」が幾度となく彼を襲うのを「錯覚」とする一方で、ルーベンは「冷静で意識のはっきりした状態」のとき誓いが履行されていないことを意識しながらも、その「深遠なる」誓いの対象がマルヴィンの遺骸の埋葬であると認識している。語り手は続けてそのマルヴィンの埋葬に出かけられない理由、そしてその理由を正当化できないルーベンの苦悩を全知的に語っているが、「しかし、出かけて行って誓いを履行するように命じる、彼にしか聞こえない (audible only to himself) 絶え間ない衝動があったし、また行こうとすればマルヴィンの遺骨のもとへ直ぐに行けるといふ奇妙な印象があった」(p. 350) とも付け加えている。ところでマルヴィンを埋葬するという誓いの存立を背後から支えてきたのはルーベンのもうひとつの誓い、即ちマルヴィンを助けるという誓いの裏に潜むヒロイズム願望であった。これが「空想」や「衝動」という形をとって現れその履行をルーベンに強要する。しかし、それはルーベンの意識によって「錯覚」と判断され、マルヴィンの死と埋葬という現実認識をルーベンに明確に示し、彼を躊躇させるのである。かくしてルーベンは「毎年彼は聞こえないが感じる (unheard but felt) その呼び声」(p. 350) に応じることはできないのだ。

死の淵をさ迷いながらも生きのびることに強くしがみついたルーベン、強靱な心と強い腕力を持つ筈のルーベンが、怠惰な農夫に徹し殻のなかに閉じこもるのは、以上の相反する誓いを果たす望みが全くないからなのだ。しかし、ルーベンは何故に「ひとつの密かな思い」(p. 350) に侵食される自分の心を「墓場」(p. 356) とみなすまで自分自身を破滅に追いやるのか。

確かに苦悩するが余り自分自身を虐待するルーベンの姿は我々の心を打たずにはおかない。しかし、人跡未踏の荒野に新生活を求めようとするルーベンの志向するものは、実は単なる新しい生活手段だけではない。「秘密の思いと孤独な感情」(p. 351) 故に利己的人間となり荒野に出ていくことになったルーベンは、息子サイラスの中に唯一の慰めを見い出してい

るが、我々はルーベンとサイラスの二人の関係を描いた一見さりげなく提出されたこのくだりの語り注目しなくてはならない。まず、語り手は15歳になるサイラスが「輝かしい男らしさ」(p. 351)を嘱望され、フロンティアの野生的な技能に秀でており、インディアンとの戦争が再び始まるのを予期している人々から国の指導者とみなされているという事実を叙述する。その直後に語り手は改行を行うことなく、ルーベンが「恰も自分の性質の中の幸せで善なる部分が息子に移し変えられたかのように」(p. 351)サイラスを愛し、自分自身の心の反映もしくは類似をサイラスの中に認めた、そして事実新鮮で幸せな生命力をサイラスと共有したと続ける。この語りから判断すれば、ルーベンが無意識のうちに志向しているのは「輝かしい男らしさ」であり、彼が荒野に赴くのは昔の自分に拒絶されたものを回復するためと言ってよい。生存本能の認識否定が生存本能の否定と形を変え、更にはヒロイズムへの憧憬の復活を促したのである。

### (3)

旅に出て五日目、ドーカスに5月12日(この日はマルヴィンを置き去りにした日である)であることを知らされたルーベンは狼狽する。その胸中を理解しないドーカスは、「父の頭を支えてくれる優しい腕と励ましてくれる優しい声があった」(p. 355)と語りかけるが、トーマス・アバムのバラッドを知っていた当時の読者は、このドーカスの言葉がヒロイズム願望を抱くルーベンを如何にさいなむものであったか、その衝撃の大きさをよく理解していた筈であり、ホーソンもその効果を狙ったと思われる。それは死に瀕した従軍牧師のフライとその死を見守って立ち去るファーウェル中尉の二人の描写を当時の読者に思い出させたことは間違いない。<sup>6)</sup>ドーカスの言葉にたまりかねたルーベンは急いで彼女の許を去る。ドーカスが無意識のうちに英雄的行為を暗示することによって与えた苦痛も弱まるにつれ、ルーベンの足取りは遅くなるが、「しかしながら」(p. 355)このと

き奇妙な考えが彼を襲い、夢遊病者のように彼はキャンプの周りをぐるぐる回ったと語り手は続ける。ということは、ルーベンの行為には英雄的行為の暗示の何らかの影響があったのだ。

さて、従来多くの意味が読み込まれてきたこのくだり、即ちルーベンがキャンプの近くを離れなかった状況に触れておく必要がある。興味深い解釈のひとつとしてクルーズやアーリックが主張しているものがあるが、<sup>7)</sup>二人は、ルーベンがマルヴィンに対して抱いた復讐心のためにルーベンはサイラスが近くにいる筈のキャンプから離れることができなかったと主張する。確かに「キャンプの近く」という語句は狩りに出かけるサイラスと夢遊病者のルーベンの二人の描写に重複して現れており、二人の行為の連関を印象づける。しかしながら、この解釈は幾つかの点で再考察する必要がある。まず、我々は今問題になっているくだり以前にルーベンが既に夢遊病者のように振舞っている事実を忘れてはならない。前年の秋にサイラスとともに開墾した場所からルーベンは無意識のうちにさ迷い、そして自分の前後を何者かに狙われているかのように注意していた。つまり、ルーベンはこのとき既に夢遊病者のような心理状態にあったのである。また、語り手は彼らがキャンプした所までに石化した海の波に似た起伏の場所が既に数マイル続いていたと述べているが、この語り手の言葉もルーベンの記憶の復活を暗示している。何故なら、ルーベンがマルヴィンを置き去りにしたときの記憶の「後半は全く印象はなかったが、全体的に不鮮明」(p. 350)であったのであるから、前半即ちマルヴィンが置き去りにされた付近はある程度鮮明であった筈なのだ。更に、ドーカスが腰を下ろした幹について語り手は何年も前に根こぎにされた木の幹と描写している。倒れた木の描写はこの作品には四回出てきており、確かにルーベンがマルヴィンの祈りの姿を盗み見したところの木と同じ木はサイラス殺害直後の場面に登場し、ドーカスが座っている木とは違う。しかし、語り手はこの二本の木が全く関係のないものどころか、我々読者にその同一性を想像させるように描写しているのだ。ドーカスがそのような木に腰を下ろしていると



言っているところからして、ルーベンもその場所の雰囲気を敏感に感じ取っている筈なのだ。

クルーズはルーベンの無意識の中にサイラスが近くにいるという事実が色濃く反映していたと主張するが、彼らの論理を逆手に取れば、筆者が挙げた事柄もルーベンの無意識に大きく影響していたこともこれまた確固とした事実であろう。更にもうひとつ付け加えるならば、語り手はこのときルーベンは樹木がうっそうと繁っているものの松の木ではない地帯のはずれにいることに気づいていないと断定しているが、それに続けて「松の木がここでは (here) 樅の木や他の堅木によって占められていた」(p. 355)とも述べている。“here”という現在形副詞<sup>9)</sup>からルーベンの無意識は以上の状況に気づいていると考えられる。とすれば、ルーベンがキャンプに付いて離れずその周りを回ったというのは、そこにサイラスがいるからではなく、自分がマルヴィンを置き去りにした場所だと感じているからなのだ。

ルーベンの意識できない動機(複数形になっている)とは利己的生存欲とは二律背反の英雄的行為への憧憬と切り離せない。いやこの二つが混然として一体となっているのがルーベンの状況とも言えるのだ。即ち、ルーベンは今やマルヴィンを置き去りにしたときの心理状態にあるのである。

森が眠りから覚めるかのように18年前に戻りつつある状態にあったルーベンは、「猟師の本能と熟練した射手の狙い」(p. 356)で濃い下ばえのヴェールの背後の物体に発砲する。18年前インディアンとの戦いでほとんど全滅に近い状態で敗走した時と同じようにルーベンが自分を見失い、下ばえのヴェールの背後に動物であるインディアンの影を見出し本能的に発砲した<sup>9)</sup>としても何ら不思議ではない。

ルーベンはこの下ばえを撃つという行為によって外界の刺激に反応するが、語り手の疎遠な語り<sup>10)</sup>に再び我々は注意する必要がある。「恰も鏡に反射したかのように」岩はルーベンの記憶に上り、「碑銘を刻んでいるかのように見える」岩脈をルーベンは「認める」。あらゆるものが全て昔と同じだが、岩の下の方には藪がある。「ロジャー・マルヴィンがまだそこに

座っていたならば隠してしまっただろう」とルーベンには思われるほど深い藪だ。マルヴィンの祈る姿を垣間見た「根こそぎになった木のところに立ちながら」、ルーベンの「目」は樫の木の変化に「つかまり」、この木に「ひとつの目立った点を見てとり」動揺する。「見たところ」その木の上の部分は「胴枯れ病」にかかっている。(pp. 356～357 を参照) このようしてルーベンの記憶は過去へと戻っていく。ルーベンの主観が前景化しているが、彼の意識の鏡に映っているのは18年前の彼であり、過去と現在の時間のギャップがなくなりつつある、いや、いわゆる時間の融合がルーベンの意識の中で起こりつつあると言っても過言ではない。

従来“RMB”の結末部分が異教的で不可解とされてきたのは、樫の木の破片の落下がこの時間融合を決定的なものにしているという事実が見落とされてきたためと言える。少々長いが問題とされる結末部分を次に引用し、筆者がこれまで述べてきた視点から分析を加えてみよう。

At that moment, the withered topmost bough of the oak loosened itself, in the stilly air, and fell in soft, light fragments upon the rock, upon the leaves, upon Reuben, upon his wife and child, and upon Roger Malvin's bones. Then Reuben's heart was stricken, and the tears gushed out like water from a rock. The vow that the wounded youth had made, the blighted man had come to redeem. His sin was expiated, the curse was gone from him; and, in the hour, when he had shed blood dearer to him than his own, a prayer, the first for years, went up to Heaven from the lips of Reuben Bourne. (p. 360)

ドーカスがサイラスを捜しに出かけるところからサイラスの死骸を見て卒倒するまではドーカスの意識に即して語られていたが、ここに至って視点は完全に転換している。だが以上のような語りの締めくくりは全知の語り

手による客観的なのかどうかは疑わしい。ドーカスは「苦悩する者の深奥の魂から押し出てくるように思われる荒々しい叫び声」(p. 360. 下線部筆者)を伴って卒倒するのだが、実はこの文を起点にしてルーベンの意識に視点は移っているのである。

さて、樫の木は静寂の中でその破片を散らすのが、このことはルーベンなどのような影響を与えたであろうか。まず、このとき森の中は風が強くないにしても枝をゆらすほどのものであったことは、ルーベン、ドーカス二人の描写の中にはっきりしている。例えばルーベンがひとり森の中を進んで行くとき、枝は騒ぎ、幹はきしんでいた。ドーカスがサイラスを捜すとき、枝は微風にゆられていた。このように動いているはずの風が止み沈黙したとき、微風の中、森の静けさの中で行われたマルヴィンの祈りの場を思い出すのは我々読者ばかりではない。この二つのシチュエーションの類似はルーベンに大きな影響を与えたものと考えられる。

語り手はこのようなルーベンの無意識の客体化、顕現化を更に押し進める。「傷ついた若者が約束した誓いを胴枯れ病にやられた男が履行するためにやってきたのだ。」「履行する」という動詞の目的語に当たる「傷ついた若者が約束した誓い」はいわゆる談話文法で言うところの左方移動(Left Dislocation)が行われているが、<sup>11)</sup> ルーベンの誓いに熟知している読者からすれば「胴枯れ病にやられた男が履行するためやって来た」の方が新しい情報となって読者に強烈に影響する。その「胴枯れ病に襲われた男」は初めて登場した言葉である。樫の木の「胴枯れ病」を凝視していたルーベンのもろもろの主観的な思いがかなり注入されていると読まねばならない。ただその胴枯れ病にやられた男が傷ついた若者の誓いを「果たしに来たのだった」という過去完了時制は、単に視点が樫の木の破片の落下以前に戻っていることを示唆してはいない。結局は樫の木の破片の落下は「傷ついた若者」と「胴枯れ病に襲われた男」の間の時間のギャップを抹殺してしまったのだが、見逃してならないのは、「胴枯れ病にやられた男」が履行すべき誓いは「傷ついた若者」の誓いと同じく、決して一元化されたマルヴィ

ンの埋葬ではなくて、二元化の状態にある曖昧な誓いということである。

その二元化された曖昧な誓いの履行に関して語り手は更に続ける。「彼の罪は償われ、例の呪いは消えた。」「罪を償う」という語彙はルーベンの意識の希望的観測を述べたくだりに書き込まれていたが、それは単独では描出されていない。「例の呪いは消えた」によって文意を追加され補完されている。その「呪い」は「彼から離れることのなかった邪運」(p. 351)を言うのであろうが、ルーベンが無意識のうちに追い求め意識の上では「錯覚」と判断されたヒロイズム願望がその背後にあった。その意味では「罪が償われた」「呪いが消えた」とはルーベンが直面した誓いの二元の状態が解消されたことを意味するのである。

語り手はサイラス殺害とルーベンの贖罪との関連づけでその語りを終える。ルーベンは「彼自身の血よりも尊い血を流したとき」初めて祈ることができたと語り手は述べるが、この論の展開は二つの点で疑わしい。まず、既に指摘したようにサイラスに見るルーベンの思いはルーベン自身の若き日々と密接に絡み合っていることを語り手は疎遠な語りによって強調している。また「祈ることができた」時点はサイラス殺害の直後ではなく、樅の木破片の落下の後、即ちルーベンの願望の成就を可能にした状況の後である。以上のことを考慮に入れれば、「彼自身の血よりも尊い血を流したとき」の部分左方移動された結果強調されているのは、ルーベンの「祈り」の時期よりも「祈り」自体の存在と言える。言い換えれば、このくだりによって我々読者が衝撃的なものとして受け止めるのは、ルーベンが「いつ」祈ることができるようになったかということではなくて、サイラスの死の時点と関連づけるべきものとして「祈り」がルーベンの胸中を占めた状況なのだ。

さて、筆者はこれまで“RMB”の語りを検討するなかでルーベンの誓いの二元性を指摘し、その二元の状態がルーベンの苦境を理解する上で重要であることを明らかにしてきた。ルーベンがマルヴィンを置き去りにしながらもマルヴィンの埋葬に逡巡したのは、偏にヒロイズムへの憧憬を主観

的な形で温存させた誓いの曖昧さがあったからであった。

ルーベンはドーカスへの言い訳の中でマルヴィンの言葉を借りつつ、「お父さんの頭上には気高い墓石が立っている」(p. 348)と弁明しているが、この墓石としての岩の存在はルーベンの心理を正当化する。それは彼にとって墓石であり英雄の碑でもあった。死という概念を「土牢のような幽閉感」<sup>12)</sup>に結びつけるような恐怖感を与える存在であるとともに、またそれとは全く対照的なヒロイズムへの憧憬の象徴でもあった。語り手はただ「墓石に似ないでもない」「その岩脈は碑銘のように見えた」と繰り返すだけで言質は全く与えていないが、ルーベンとマルヴィンの二人にとっては共通した碑として機能していたのだ。ルーベンはマルヴィンの言葉「獅師と古つわ者がその下に眠る岩」に繰り返し注視しているうちに、ラヴェルの戦いの碑としての岩に憧れた。ドーカスに会った時点で「君の父と息子の墓石」(p. 360)と話していることからわかるように、サイラス殺害後もルーベンは「岩」の領域外に自分を置いている。事実ルーベンはマルヴィンとサイラスの二人とは藪によって隔てられており、立ち去るときマルヴィンを盗見したときと同じ状態にある。ルーベンがサイラスの死体を前にして「ぞっとするほど青ざめていた」(p. 359)のは、息子を偶然に殺害した自らの運命に絶望感を抱いたと同時に、自分が再び英雄的行為のかやの外に置かれたことに絶望感を抱いたからなのだ。「ぞっとするような」「動かない」という形容がマルヴィンを置き去りにしていくときのルーベンの死に対する恐怖感(インディアンとのイメージと重ね合わされている)の描写の中に出てきていたが、この場面に至ってもルーベンは死を自分の運命として受け入れられなかった18年前のルーベンと同じ状況にある。

「輝かしい男らしさ」を持つ昔の自分(サイラス)の死がルーベンの英雄的行為願望と結びつくには、つまり聖書の中のサイラスが岩の中から水をほとばしりださせイスラエル人を救ったのと同じように、<sup>13)</sup>ルーベンの息子のサイラスがルーベンに落涙させるには、「期待空想」が生み出す「幻影」<sup>14)</sup>がどうしても必要であった。その幻影を醸成したのが静けさの

中で舞い降りる木の破片であった。マルヴィンの「秋風が樅の木の葉を散らすとき、それによって包まれて横たわっていいではないか」に無意識のうちに影響を受け、<sup>15)</sup> 樅の木の破片が自分にもかかったことでルーベンは泣き出すのだ。「岩」の領域内に入ることができたルーベンは、ようやく自分の若き日のシンボルとも言えるサイラスの死を自分自身の死として感得できたのである。自分自身を「切り裂き」(shed の語源は“cleave”である) その血を流したルーベンは、樅の木の破片の落下を契機にして自分の心に「一撃を加え」涙を「流させる」ことができたと言える。

ルーベンにとってマルヴィンは単に埋葬されるべき存在ではなかった。ドーカスに対しても彼はマルヴィンの死に直接言及していない。彼が意識的にマルヴィンの死を自分に納得させようとも、マルヴィンはルーベンの深層意識のなかでは18年後の現在でも生きていたのである。マルヴィンの死を確認することは死への恐怖と臆病さを認識することと同じであった。それは当時の人々が最も大事にしていたヒロイズムへの憧憬を捨て去ることであり、自己の存在価値を否定することに等しかった。ルーベンは昔のよき自己をサイラスの中に見出し、岩のふもとの藪の中に未だにマルヴィンが「生きたまま座っている」のを無意識のうちに願望していた。ルーベンの苦境は彼が誓った二つの約束、マルヴィンを助け、マルヴィンを埋葬するという矛盾した誓いを共に履行するという形でしか解消できないものであった。マルヴィンを埋葬するという誓いは、マルヴィンを助けるという誓いの背後にあるヒロイズム願望が満足させられなければ履行できないものであった。ヒロイズム願望を抱きつつマルヴィンの許に辿り着いたルーベンは、サイラスの死骸に昔の自分の犠牲を投影することによってマルヴィンの死骸の傍らに昔の自分を横たえ、ルーベンにとって死につつも生きているという矛盾したマルヴィンの存在から自分を解き放つことができたのである。

ルーベンはその誓いを期待願望によって同時に解消するが、ところが、彼の祈りはマルヴィンの祈りとも質を異にする。マルヴィンがルーベンの

良心を幾度も悩ませるほど子孫のことに触れ、一人荒野に残されながらルーベンとドーカスのことを祈ったのは、自らの死が避け得ないことを認識していたからでもあった。子孫のことを気にかけるのは死の必然性を認識した結果なのだ。<sup>16)</sup> ルーベンの祈りの対象の欠在はその祈りの空しさを象徴しているように思えてならない。

#### (4)

「ラヴェルの戦いにはロマンスの装飾の余地はない」<sup>17)</sup> とまで当時言われていたラヴェルの戦いは、アメリカが勝ち取った独立と自由のシンボルとなっていた。ホーソーンが皆の記憶に強く残っていると述べているように、彼の周囲でもこの戦いは賛美的であり、大々的に謳われていた。シムズはファーウェル大尉を「疑い無く賞賛され悲しまれて当然の」人と評したが、この姿勢はアパムのバラッドにも受け継がれ、やがてはアメリカの独立神話に結びついていく。だが、これらはシムズがその弟子のフライの暴挙を救うべく腐心し作り上げた虚像でしかなかった。「この事件に関する記録に於いては歴史も伝説もいつになく詳しい」(p. 337)とするホーソーンが、シムズの他にベルクナップやハッチンソンの文献にも目を通していたことは先学によって確証されている。<sup>18)</sup> 開拓地の人々を守るため企てられた遠征が敵地の中央で戦われたと語るホーソーンは、ラヴェルの戦いがインディアンの頭皮に賭けられた賞金目当てのものだったという事実を熟知していたのである。この戦いに於いて最初にインディアンの頭皮を狩ったのが従軍牧師のフライであったことも“RMB”以前に明らかになっていた。更に1725年頃のニュー・イングランドではインディアンの頭皮で作ったかつらを着ける習慣があったことを *The American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge* の中でホーソーンは披露しているが、このこともホーソーンの意識の中ではかなり大きく作用していた事実であったろう。<sup>19)</sup>

アメリカ・インディアンは白人の個人の所有権、個人の権利を主張する所有欲の強い個人主義<sup>20)</sup>を妨害する大きな障害物であったが、ホーソーンの同時代のアメリカ人はその利潤追求の動機を美化し、更にはそのような追求の果てに荒野に散ることを“glorious”とみなした。同じく、「数知れない訴訟」(p. 350)の国ニュー・イングランドで育ったルーベンは、その病んだ想像力によって“glorious manhood”を追求し、英雄的行為に同化してしまったのである。

ホーソーンは1832年に“RMB”の他に「優しい少年」「私の親戚モリス少佐」といった優れた作品を発表しているが、この三編に共通しているのは作品冒頭の歴史的背景についての陳述である。上記の二作品の批評に於いて従来強調されてきたのは両作品がアメリカの歴史を超越して存立しえないということであり、“RMB”の場合もこのことは例外とは言えないであろう。サイラスが死んだのはラヴェルの戦いから18年後の1743年頃、この年は再びインディアンとの戦争が始まった年でもある。限りなく西へ伸びてゆくフロンティアに対して当時のアメリカ人が抱いていた夢の崩壊が、同じ内容の白日夢を抱くサイラスの不可避の死、及びその中に病的な贖罪を見るルーベンのヒロイズム願望によって予示されていることは言うまでもない。

(本稿は昭和63年6月25日、中四国アメリカ文学会第17回大会で発表したものに加筆・訂正したものである)

#### 註

- 1) “RMB” 批評に於いて、ルーベンがマルヴィンを置き去りにした罪、ドーカスに嘘をついた罪、サイラスを殺害した罪のどれがルーベンの犯した罪の中で最も大きいかが問題にされることがあるが、事はそれ程単純ではない。ルーベンがマルヴィンを置き去りにする状況が後の状況を生み出していることは明らかで、例えば Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1955), pp.95—96 はルーベンの罪の意識が“original failure of



honesty” によるものとし、一連の選択の誤りの結果とする。Michael J. Colacurcio, *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne's Early Tales* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1984) はルーベンの“doubleness”を分析し、究極的にはルーベンがその動機に正直でなかったと結論する。しかし、ルーベンがマルヴィンを置き去りにする状況を重視するこの解釈もルーベンの誓いを単純化し過ぎていて嫌いがある。埋葬のためマルヴィンの許に戻るといふ誓いと彼を助けるという誓いが二律背反的に存在していることが見逃されている。

- 2) cf. Frederick C. Crews, *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes* (New York: Oxford University Press, 1966), pp. 80—95 and Gloria C. Erlich, “Guilt and Expiation in ‘Roger Malvin’s Burial,’” *Nineteenth-Century Fiction*, 26 (1972), 377—388.
- 3) “Roger Malvin’s Burial,” *Mosses from an Old Manse*, Vol. X of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat et al. (Columbus: Ohio State University Press, 1974), p. 337. 以下“RMB”に関する引用はすべてこのテキストによる。
- 4) Robert J. Daly, “History and Chivalric Myth in ‘Roger Malvin’s Burial,’” *Essex Institute Historical Collections*, 109 (1973), 112—115.
- 5) Jack Kligerman, “A Stylistic Approach to Hawthorne’s ‘Roger Malvin’s Burial,’” *Language and Style*, 4 (1971), 188—194 は“RMB”の文構造からルーベンの受け身的な状況を分析している。
- 6) Thomas Upham のバラッドにはドーカスの言葉と近似した箇所があるが、引用すれば、“Lieutenant Farwell took his hand, /His arm around his neck he threw, /And said, brave Chaplain, I could wish, /That heaven has made me die for you.”である。尚、このバラッドは G. Harrison Orians, “The Source of Hawthorne’s ‘Roger Malvin’s Burial,’” *American Literature*, 10 (1938), 317 に紹介されている。
- 7) Crews, p. 91 はルーベンがサイラス殺害願望のために“the vicinity of the encampment”を離れなかったと分析し、Erlich はルーベンが初めからサイラスを殺害することを意図していたと解釈している。
- 8) Roger Fowler, *Linguistics and the Novel* (London and New York: Methuen, 1977), p. 102. 時間と空間は「近接」と「非近接」という範疇の対立によってパターン化されるが、here は「近接」語である。過去時制（非近接）と近接時間副詞の結合は、語り手の視点を登場人物の視点に

置き換えたことを明示する。

- 9) Neal Frank Doubleday, *Hawthorne's Early Tales, A Critical Study* (Durham: Duke University Press, 1972), p. 197 はこの箇所を “a failure in technique” としているが, Thomas Symmes によるラヴェルの戦いの描写ではインディアンは動物でしかなかったことを考慮に入れば [Gail H. Bickford, “Lovewell's Fight, 1725—1958,” *American Quarterly*, 10 (1958), 360 を参照], 18年前の緊張の状態にあったルーベンが狙いすまして撃ったとしても不思議ではない。
- 10) cf. Boris Uspensky, *A Poetics of Composition* trans. Valentina Zavarin and Susan Wittig (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1973), p. 85. 疎遠な語によって特徴づけられる外的視点はホーソーン作品では通常 ambivalence を醸成するが, ここでは作者は疎遠な語を用いることによって語り手の存在を顕在化させ, 語り手とルーベン, 更には読者とルーベンの間に共感が欠落していることを暗示している。
- 11) cf. Ellen F. Prince, “Topicalization, Focus-Movement, and Yiddish-Movement: A Pragmatic Differentiation,” *Proceedings of the Seventh Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 7 (1981), 249—264, and Robert Rodman, “On Left Dislocation,” *Papers in Linguistics*, 7.3—4(1975), 437—466.
- 12) “Chipping with a Chisel,” *Twice-Told Tales*, Vol. IX of *Centenary Edition*, p. 418.
- 13) W.R. Thompson, “The Biblical Sources of Hawthorne's ‘Roger Malvin's Burial,’” *PMLA*, 77 (1962), 94.
- 14) “expecting fancy” が生み出す “illusions” はサイラスを捜しに出かけたドーカスの描写のところに出てくる。ドーカスの期待空想が破れる部分がルーベンの主観の前景化とルーベンの行為の正当化の間に位置しているのは興味深い。
- 15) この言葉が碑としての岩への言及の直前に出ていることは, 英雄的行為との関係が強く暗示されていることの証差でもある。*The American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge* の中でホーソーンはインディアンに襲撃された Hannah Duston の家族に触れているが, 一人荒野で死にゆく様 (無論彼女は助かるのだが) を同様の表現で描写している。Arlin Turner, *Hawthorne as Editor* (1941; rpt. Folcroft, PA.: The Folcroft Press, Inc., 1969), p. 135 を参照。“Septimius Norton,” *The Elixir of Life Manuscripts*, Vol. X III of *Centenary Edition*,

p. 243 にも同様の言及がある。ところでルーベンは秋の落ち葉と胴枯れ病の樫の木の破片との間に類似を読み取っているが、このことについてもう少し詳しく触れる必要がある。樫の木は中央から下は“excess of vegetation”の状態にあるが、ドーカスが逞しいサイラスと見間違った木と同じものであり、樫の木の“excess”な状態はルーベンのヒロイズム願望の肥大化を意味していると解釈できる。一方、樫の木の枯れた部分は、ルーベンの罪意識、罪意識の背後にヒロイズム願望が潜んでいることから言えばルーベンの非望した罪意識と言い換えられるが、その罪意識によってもたらされたルーベンの病んだ精神状態を象徴している。従って樫の木の枯れた部分の落下にヒロイズムを見るルーベンは完全に主観の世界に退行したと言える。尚、樫の木については Birdshall と Samson の二人が分析を加えているが、筆者としては特に Samson の結末部分の解釈に賛成したい。cf. Virginia O. Birdshall, “Hawthorne’s Oak Tree Image,” *Nineteenth Century Fiction*, 15 (1960), 181—185, and John Samson, “Hawthorne’s Oak Trees,” *American Literature*, 52 (1980), 457—61.

- 16) *The American Notebooks*, Vol. VIII of *Centenary Edition*, p. 186: “The love of posterity is a consequence of the necessity of death. If a man were sure of living forever here, he would not care about his offspring.” ヒロイズムを非望するルーベンはマルヴィンを“generous being”と捉えているが、その“generous”が語源的には「豊饒」「誕生」を表すことも指摘しておきたい。
- 17) cf. Ely Stock, “History and the Bible in Hawthorne’s ‘Roger Malvin’s Burial,’” *Essex Institute Historical Collections*, 100 (1964), 282.
- 18) ホーソンは Thomas Hutchinson を “accurate, at least, though far from possessing the brilliancy or philosophy of Mr. Bancroft” (*Centenary Edition*, VI, p. 138) な歴史家と評しているが、ラヴェルの戦いの動機は Hutchinson の歴史書 *The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay* ed. Lawrence Shaw Mayo (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1936), p. 236 にはっきりと述べられている。白人側が戦いを仕掛けた日は、Hutchinson に於いては実際の 5 月 9 日 (日曜日) ではなく 5 月 8 日 (土曜日) となっており、ホーソンも踏襲しているようだが、戦いの動機がインディアンの頭皮に賭けられた賞金目当てであったことは少なくともホーソンは知っていた。更に興味深いことには、ラヴェルの戦い後の平和を “owing to the subsequent acts of government in conformity to the treaty” (Hutchinson,

- p. 241) とする Hutchinson はイギリス側のインディアンに対する不正を数多く挙げており、ホーソーンに大きなサジェスションを与えたものと思われる。尚、Thomas Symmes の引用 “no doubt deservedly applauded and lamented” は G. Harrison Orians, 316 にある。
- 19) Arlin Turner, p. 230. 勿論 1836年にホーソーンが出したこの記事の内容について、彼が “RMB” 執筆時点で知っていたかどうかは定かではないが、“Sir William Phips” (1830) には既にインディアンの頭皮のかつらへの言及がある。
- 20) cf. John Samson, 459—461 and Michael Rogin, *Fathers and Children: Andrew Jackson and American Indian Policy* (New York: Knopf, 1977), pp. 1—15.

(昭和64年1月7日受理)